

大変刺激的な内容だったものですから、それを直ぐにまとめて何かコメントするほどの力もないし、今聞いたばかりだということもあるので、的外れなことがあるかもしれませんが、お願いします。

由井さんの企画で大変ユニークなセッションだったなと思っています。それぞれの5人の方々の発表を聞かせていただきました。私自身は男性性とか男らしさの研究はしているのですが、具体的な焦点があるのは暴力のことです。虐待とかDVとか、それから刑務所なんかでいろいろ立ち直りのわりと臨床的なこともやっています。そうすると共通にいろんなかたちで性とか生殖の問題が男らしさと関わって、歪みだったり、過剰だったり、それから欠落だったり。いろんなことで関わってくるので、その観点からも、面白く聞かせてもらいました。それで男性性として聞いていると大変寒々しくなってきました。それと全体を聞いていてですね、端的に印象深くいうと、伊藤計劃さんのSF小説を読んでいるような感じがしました。『ハーモニー』とか『虐殺器官』とか、これモノ化とかですね。健康でなければならぬ、ということをかなり強調したSFです。まあSFじゃないですよ。現実感をもってリアルに迫ってきたし、歴史を遡れば当然それは過去にもそんなことがすでにあっただし。ということで文学者の想像力だけじゃなくて、人文科学者たちの豊かな想像力が大変しみじみと迫ってきたところです。

全体としていくつか共通にあったようなこともありました。性と生殖を分けること、あるいは性と生殖が分けられることで、いろいろ中身が見えてきた。あるいは逆に言うとそれで最終的にはセックスもできなくて、精子もないという、男性性の中でも多層性が大変よく見えてきて。これはもともと男性性研究の中ではコンネルさんという人の議論でヘゲモニックなマスキュリティというのが中心的にあって、そこの差異化あるいは関係付けで、いろんなタイプの男らしさ像がでてきた、ということです。

それともう一つだけさらに紹介しますと、今はその軸だけではなくて、もう

視野に入っているのだらうと思うのですが、ユニークな言葉があります。プレカリアス（precarious）な男らしさ、つまり不安定なとか、決めにくいとか、という意味での言葉です。ヘゲモニックってということと、それからそれと関わって従属とか周辺とかいろいろ置いてきたものとは別の軸で、そのように言わざるを得ないほどに、やはり男性性というのがある種の虚構性を持っている。それで何らかのかたちで力とか暴力とか、いろんなタイプの物語がそこにくっつかないと、男性性が固有に自己決定できない。それをシャワーのように浴びながら、男性たち自身もそれを実践してしまっている。社会制度も当然男性性システムがそこに入り込むので、社会制度も含めてある種の不安定さを補強したり強化したりするようなものとして、男性性が存在しているという意味です。ですからヘゲモニックだけではない軸が大変豊かに議論されています。これは主にですね、精神医学とか、心理臨床とか、メンタルヘルスとか、健康とか、公衆衛生とか、そういうところからきている概念です。それで最近の研究ではですね、男性性というのは元々フィクショナルなものなのですが、とりあえず多くの人が、これが男性性であろうと思っている素朴理論をたくさん集めて検証して、尺度を作るわけですね。その中でもメンタルヘルスに否定的な影響を与えている要素との相関をみていゆきます。メンタルヘルス指標は鬱的であるかとかですね、ポジティブには、今自分が健康な生活を営んでいると思うかですね、それからあと人に援助を求めるか求めないかとか、いくつかメンタルヘルス上大事なキーワードを置いて、素人理論的に確定された男性性と相関させてメタ分析をする研究がたくさんあります。それで計るとですね、いくつかの男性性が取り出されてきます。共通に多くの人が男らしいと、女も思っている、男も思っている。そういうタイプのものが出てきたなかで、メンタルヘルスにとっても否定的な影響を与える男性性の項目が3つ浮かび上がってきました。ビッグ3とも言われています。ひとつは性的な奔放さです。性的な奔放さというのが大変男らしさの神話のようにして、共通にそれも男らしい行動パターンとして取り出されるのですが、そのことが結局はフィクションであるので、それと倫理や規範にも反することがあるので、これはそういう倫理を破ることが男らしさという面もありますが、実際上は無責任な側面がでてくるので、メンタルヘルス上よくない、こういうことでとても鬱的だったり、そ

れから絶えず自己満足できなかつたり、絶えず女を求めているわけなので、絶えず自己満足できない自分を作ってしまった。次は女性蔑視的態度、女性への態度です。それから援助を求めないこと。このビッグ3がですね、とても今の社会でいう共通に思われている男らしさの内実となります。これをさらに補うかたちで性の絶倫さとかですね、暴力とか、それから男は黙って相談しない。こういう行動様式が出てくるので、それらを捉えて、それはヘゲモニックなんだろうかという問いかけです。それはヘゲモニックのように見えるだけで、内実はどうなのか、ということを検討するアプローチがこの概念です。これはコンネルさんへの批判でもあります。

ということで、私今日澁谷さんにとっても前から会いたかったのは、このあたりのことをですね随分若い頃に批判されて、我々に対して、男性研究を進めていた我々に、物凄く大事な論点を投げてくれました。もう10年以上前でですけどね。その論文（澁谷知美『フェミニスト男性研究』の視点と構想——日本の男性学および男性研究批判を中心に』『社会学評論』51（4）（2001年）、447-463頁）、とても印象深く、マスキュリニティーズという複数形を置くだけでは意味がないのではないかと。そういう批判を受けました。何か大事なものが隠蔽されていくのではないかなということ、もう随分前の論文ですけど書かれて、それ以来私も心に留めていたことです。それで最近こういういくつか論点が出てきて、その中のひとつに今日の性と生殖をめぐる問題がとてうまくヒットしたなと思っています。

その中で、全体聞いていてとても面白かったのですが、もう少し個別的にですね、質問を含めてさせてもらおうと、竹家さん。最終的に夫婦問題としての文脈作りが大変大事だということとそれから不妊というものが、男性不妊が顕在化するのがやはり夫婦というものがないとダメだ、ということで、とても構築的な話をされたと思います。調査なのでユニークなものが出てくるのですが、そうするとこれは医療の対象なのだろうかという疑問が、とても強く喚起されて。で、最初の瀧川さんが随分技術的な話をされたわけですね。そうするとこれは一体「何問題」として現場では起こっていて、夫婦問題だといえはうほど、医療ではなくなっていく面が出てきたりすると思います。それから私も心理相談なんかの活動をしている場合で、男性不妊がテーマになって相談に来

る場合がありますけれども、DVだったりですね、それからセックスレスだったり、いろんな問題とともにやってくるということなので、病院とは違うタイプの相談を、窓口をひらくとですね、全く違う様相で見えてきて、最終的には離婚するしかないかなということに落ち着いていくケースなんかもあります。ということで、いったい「何問題」として最終的に語ってあげればいいのかということ、インタビュー調査からとてもよく見えたので、教えてほしいなということです。

倉橋さんにはですね、メディア研究者らしくとてもインパクトのある、教えられることも多くて、知らないことも多かったのですが、最終的にヘゲモニックな男性性と距離をとる悩みが書かれていましたよね。それはどのように存在している男たちを想定してるのだろうかということ、もう少し教えてほしいと思います。

それと由井さんはですね、最後の方のレジュメで奇妙なねじれってのが出てきました。そうするとこのプレカリアスというのは、プレカリアートという言葉と繋がっていきます。最下層の労働者たちということの言葉でもあるようですが、セックスもできない、勃起もしない、精子もないというこの層が出てきましたよね。それが一番問題ではないかと書かれていたあたりからすると、やはりそこには性と生殖を分けたがゆえに、下層化されていく、あるいは貧相化されていくような男性たちが出てきて、この中のマスキュリニティーズみたいな複数形がとてもよく見えました。絶倫タイプで頑張ってる商業主義ののっていくようなタイプとは違う存在を指摘されていましたよね。奇妙なねじれというものなのかで、下層化されていく男性たちの存在を多分念頭に置かれているのだと思いますが、そうするとさっきの倉橋さんのもう少し距離を置く男性性、多分それはご自分のことも重なっているのかなあと思ったりするのですが、そこはどんな希望があるのかなのか。それは男性不妊だけ焦点をあてればそうですけど、例えば養子縁組とか、別の選択で家族を作るということに、例えば女性からみた不妊治療はなってくるかもしれませんが、男性がですね、従来持っている男性規範からすると、子育てに必ずしも責任もたないとか、タネまいて終わりとかですね、そういうタイプの子どもつくる／つくらない、あるいはタネがちゃんとそこに機能するかどうかではない、というような問題を

元々孕んでいましたよね。男性性はね。そういうものと抵触するはずなんですよ。ですので、不妊治療の、ひとつの選択肢として、養子なり里子なり、子どもを育てるということに焦点をあてた、別の選択肢があると思うのですが、そうすると男性はますますなくなる可能性がありますよね。そこをどう思われてマスキュリニティーズと称して、プレカリアスなマンフッドの多層性をどう語れるのか、ということを知りたいなと二人に対しては思いました。

それと澁谷さんには、本は前から読ませてもらっているのですが、この歴史的な研究をどう生かせばいいか、という観点から聞かせてもらいたいです。M検とは称していないのですが、私今刑務所で調査しています。性犯罪者たちの再犯防止教育をしています。そうするとですね、そこには大変特殊な身体検査様式がついています。玉入れというのがあります。玉入れというのはですね、運動会の玉入れではないですよ。ペニスに玉を入れているかどうかです。これは要するに女性を喜ばせる、そういうタイプの亀頭の形状ですよ。亀頭とペニスの本体ありますよね。玉を入れて、ごつごつを作って、まあ相手を喜ばせるという、これもある種の性欲神話みたいなものなんですけどね。それがちゃんとあるかどうか、ないかどうか。玉何個って書く欄があるのですが。そういうのをやるということは、検査するということですよ。事実として記載するような身体検査表があります。これは大変ユニークなんです。そういうかたちで、部分的にしろ、70年代まで大学でやられていたということらしいけど。かたちを変えて多様に存在している可能性が高いです。こういった意味では大変、それはでも暴力性とか、さっき言った生殖性とか、絶倫性とか、物凄く関わっている過剰さがそこに出てきます。これはたぶん暴力団関係のタイプだと思います。そういうことを考えると、男らしさの規範とは大変プレカリアスなんだけど、とてもヘゲモニックにいきていて、それが物凄く虚構っぽくなっていて、それを制度が支えたりしていると。それはだから子どもをつくる／つくらないという性と生殖を分けたのはいいのだけれども、物凄く男性性の中での多層性を作ってしまったというのが、今日よく見えました。そういう意味で、澁谷さんの全体的に特にここがというわけではないのですが、男と女の未来を考えるうえでもし何か話があれば、もうちょっと話してほしいなと思います。

ただ男がそういう選択肢が十分につまっていなくて、結局子どもほしいというとても女性的なその言い方で不妊治療がありますよね。動機付け。子どもがほしい。男性のタネをまくという行動は、それはどういう希望や欲望や願望としてあるのだろうか。現に男たちが十分イクメンしてないのに、その人たちが本当にイクメンするのだろうか。絶倫のイクメンって何だろうなと思います。というようなことについて、皆さんの研究はどんな示唆を与えるのかな、という観点からぜひ、澁谷さんには総括的に話をしてほしいなと。男と女の未来と書いてあったので、お願いしたいなと思いました。

瀧川さんのはそれはもうジェネラルな報告で面白くて、そうすると瀧川さんとの関係でどんな相談としてご自分が話をされているのかという話をしてほしいなと思った次第です。ちょっと雑駁ですが、あっちいたりこっちいたりしましたが、男性性研究をしている者からして、とても面白いセッションでした。とりあえず一旦以上でございます。